



加藤九祚名誉教授に聞く

人と人、人と物との間に橋を架ける

シベリア抑留生活をロシア語留学にしてしまう知識欲とプラス思考。その奥底に流れるのは、人との縁や絆を大切にしているヒューマニズム。民博着任などの節目を「スタートライン」と捉えた学究の徒としての真摯な姿勢とともに加藤名誉教授の旺盛な探求心は、米寿を迎えた今も健在である

聞き手 久保正敏 (本誌編集長)

—先生はシベリアや中央アジアの文化史をご専門とされています。シベリアとの出会いはそのようなものだったのでしょうか。

シベリアとの出会いは、四年八カ月におよぶ抑留生活のなかで、ロシア語を猛勉強したのがそもそもの始まりです。

八月一日に戦争が終わって、私たちが武装解除したのが二〇日ごろでした。ウラジオストクを通過して日本へ帰れると言われて、多くの日本人もそのことを信じていたようでした。

私はドイツ語ができたので、ドイツ語が話せる西部戦線帰りのロシア人将校に聞いてみたら、「君たちは数年シベリアにいたことになるだろう」と言うんですね。このままでは、生きるか死ぬかもわからぬままになってしまっているのではないかと死ぬなら死ぬで、自分の状況を知ったうえで死にたい。一緒にいる人たちにも状況を伝えてあげたい。そのためにも、ロシア語を勉強しないとどうにもならないと思いました。

—普通は捕虜になると、悲観したり、絶望的になってしまったりするのではないのでしょうか。

そう。捕虜になっても、その日その日を過ごせばいいようになってしまっただけで、そのあいだも勉強していましたからね。

捕虜尋問用会話集を教科書に

出兵する前、上智大学予科に通っていたころは、哲学を志していました。哲学者の三木清の著作に『パスカルにおける人間の研究』という名著があって、そのなかにか



探検家ブルジェワリスキーの墓をたずねる(キルギスのイシク・クル湖岸、2007年)

までも忘れられない文句があります。人間は自然のなかでは弱いもので、これを殺すにはたいした武器もいらない。一滴の水でも足りる。しかし、人間は自然が偉大であることを知っているという意味において、自然よりはるかに勝るといえる内容です。知識や、知ることがいかに大事であるかということですね。

私はそうしたことがずっと頭のなかにはありました。だから、自分が置かれている状況を知りたいと思っロシア語を勉強したんです。

私たちが終戦を迎えた敦化という中国の東北部にある都市の飛行場に、ハルピンの図書館から運ばれて来たと思うんですが、貨車一杯の本が山のように積まれていました。そのなかに、陸軍関係の本を出版していた偕行社が刊行したロシアの捕虜尋問用の日露対訳会話集がありました。それがロシア語との出会いでした。あとはロシア人の将校をつかまえて、片っ端から聞いていきました。私は尋問されるほうでしたけどね(笑)。

汽車でシベリアに送られる途中、駅で長いあいだ止まることになりました。ときには二晩も三晩も止まるんですよ。そのとき、ロシア人の子どもたちが寄ってきたんです。私は学校のテキストはあるかと聞きまして、ノートやいろいろなものとの交換

して、ロシア語の教科書を手に入れたんです。それから、人に頼りながら頭から数ページ覚ええました。そんなふうにして、ロシア語の勉強を続けました。

一年くらいしたら、ずいぶん上手になりました。簡単なことなら通訳もできるようになったんです。そうしたら、「お前はどこでロシア語を勉強したのか」とスパイの疑いをかけられてしまいました。ずいぶん時間はかかりましたが、結局は戦犯にならなくてすみました。

—シベリア抑留を「シベリア大学」と呼んで、抑留生活をプラスに考えられたそうですね。

プラスに考えられるようになったのは、日本に帰ってからです。帰国してから、アルバイトをしながら上智大学ドイツ文学科に通いました。帝政ロシアは革命によって倒されてソ連になりましたが、両者の思想のあいだにはつながりがあるのか、つまり帝政ロシアとソ連の思想における連続と断絶をテーマにしようとしたのですが、まとまった資料がなくてどうにもなりませんでした。

発想の転換「シベリアをフィールドにする」

当時、梅棹忠夫さんや川喜田二郎さんたちによるアフリカやヒマラヤへの現地調査が新聞に載っていたりして、私もこのような調査に加わられたらいいんだけど、高嶺の花だと思っていました。そのころいろいろな探検記を読んでいて、そのなかにブルジェワリスキーというロシアの有名な中央アジア探検家がありました。彼がシベリアを調査した旅行記を読んでいるうちに、「そうだ、私はシベリアに行ったことがあるんだから、そこをフィールドと考えたらいいんじゃないか」と思い

国立民族学博物館名誉教授。学術博士。一九三二年、韓国慶尚北道に生まれる。上智大学文学部卒業。陸軍工兵少尉として戦後、シベリア抑留生活を四年八カ月経験する。一九七五年から一九八六年まで民博教授を務める。その後、相愛大学、創価大学教授を歴任。『天の蛇』、『コライ』、『ネフスキーの生涯』(河出書房新社、一九七六年)で大佛次郎賞を受賞。『中央アジア歴史群像』(岩波新書、一九九五年)など著書、訳書多数。

ついたんです。これはたいへんな発見でした。ソ連を憎んだり、シベリアに行かされた運命を呪ったりしてもしかたがない。あるがままを受け入れて、そこからなができるのが、私の生きる道ではないかと思ったのです。そう思えたことが、自分でもたいへん嬉しくてね。さっそくシベリアの歴史に関する文献を読みはじめました。

私は、なにかを知りたいという欲求の強い人間だと思います。今日あるのも知識欲のおかげだと思います。私はとても貧乏な家に育ちました。でも、親は本をたくさんもっていた。

親父が、「俺は勉強しなかったけど、できなかった」と言っていたことを思い出します。私もいつかその本が読めるようになりたいという気持ちはずっとありました。子どもの周りには必ずいい本を置くべきです。読めなくてもいい。ただ、子どもに、いつかこの本が読めるようになりたい。内容を知らりたい、そういう思いを抱かせることができれば十分です。邪魔になるから本を捨てるといふ人がいるが、そうじゃなくて、邪魔になるからこそ置かなきゃならないんです。

知識とは新しいことです。知識欲とは、つまり新しいことを知りたいという欲求ですから、新しさにも関心があつたと思います。私がこれまでやってきたことは計画的なものではなく、知識欲からきているんです。

民博がスタート台

民博には、尊敬する梅棹忠夫さんやほかの先生方からのお誘いで、一九七五年に着任しました。ソ連に住む諸民族の伝統的物質文化の資料を収集することを期待されたと思います。それまで何

女性は、その土地と密着していると
思うからです。男性は、自分も含めて土地と離れたがる傾向があると思うんですよ。だから、その土地でなにをするにしても、女性に援助してもらったほうが円滑にいく。資料収集をしていくわかりました。
民博を定年（一九八六年）になったのも、新たなスタート台でしたね。さいわい親や、先生方のおかげで今日があるわけですが、なにはなくとも丈夫な体に生んでくれたこと、知識欲のある子に育ててくれたこと、この点をいつも両親に感謝しますね。



中央・北アジア展示にあるウズベキスタンで収集した二輪の馬車

自分でできることはなにか

——現在も続けておられる発掘や考古学への関心はいつごろもたれたのでしょうか。

考古学への関心は民博を定年になってからです。これまでずいぶんと書籍を翻訳していくうちに、私自身も新しいことをしたいという気になりました。考古学は、発掘品の研究もありますが、掘り出すだけでも十分新しいことができると思っています。発掘の労をいとわないうこと、現地の人のつながり、そしてわずかなお金があれば可能ではないか。考古学や仏教の知識に足りない部分があるなら、そこは専門家にみてもらうとして、ほかの人ができないことをしたいと思ひ、発掘にたどり着きました。

それまでやっていた翻訳も価値のあることだと思っています。翻訳とは、橋を架ける仕事だと思



梅棹忠夫初代館長（左端）とともにモンゴルで調査する加藤名譽教授（右端）。（カラム、1982年 提供・庄司博史）

度も旅行していましたし、そこにいろんな人間関係ができていきましたからね。中央・北アジア展示の一般公開ぎりぎりまで収集していました。ある先生がちらつと「間にあわないかと思った」と言っておられました。間にあつたのでずいぶん喜ばれました。

民博に誘っていただいたおかげで、私がこれまでやってきたことにお墨付きをいただいたという思いがあります。加藤は使える人間だと。

私は人生のなかで何度か、研究者としては近道ではない道歩んできました。ひとつは中学校に行かず、職工学校に行ったことです。そのため上智大学予科に行くには検定試験に受からなければなりません。入学できたとき、「ああ、これで他の人と同じスタート台に立てた」と思いま

うんですよ。私は陸軍の工兵出身で、これも橋を架ける仕事です。華々しい仕事をしたくないわけではないけど、それは少数の運のいい人ができることだから、自分は裏にまわつて、橋を架ける仕事ができるればいいのではないかと思ひます。国際交流というのも、人と人との橋を架けることではないのかと。

とにかく、私ができることはなにかを考え、できることをしたいのです。

考古学は、ものによって語りしめる側面があります。しかし、物事は人間なしにはありえません。ものを語るときは必ず人間と抱き合わせて考えるという姿勢をもちたいと思うのです。考古学でも、それを掘った人は誰で、どのような状況で掘ったのかも考える。出てきたものだけでは、たとえすごい黄金だとか、すばらしいものだとしても、感銘を受けません。その裏にある学者の姿勢や生き方を、いつも一緒に考えるんです。

その背景から人間の性が見えてくるんです。善かれ悪しかれ、すべてのものは、人間をめぐつてあるわけです。本を読んでも、人間のことが書いてないものは楽しくないですね。

——どうしてウズベキスタンを選ばれたのでしょうか。

ウズベキスタンにはおもしろい仏教遺跡が多かったのです。民博の資料を収集するときにも、ウズベキスタンの人にお世話になっていましたし、人間関係もできていました。ロシア科学アカデ

した。民博に入れたときも、ほかの人が東大出身であろうと京大出身であろうと、私も同じ土俵に立てたんだと思ひました。

——先生が収集された資料を探してみると、二八〇〇点あまりあります。収集の際の苦勞などはありますか。

中央アジアで収集したものは移送しやすい衣類が多かったのですが、大きなテントや馬車なども収集しました。馬車はパーツごとに分解して、それぞれに袋に入れ、縫いとめました。それを飛行機に載せ、モスクワ空港に着いたときには、もう夜も遅くなっていました。保管してもらうところもないから、空港のなかの閉めかけの店に持つていつ、「すみませんが明日の朝まで預かってくれないませんか」とお願いして、なんとか店の前に置かせてもらうことになりました。

いまでも心残り、門扉を収集できなかったことです。中央アジアには門扉を大事にする習慣があるんです。桑の木かなにかでつくられていて、幾何学的な彫刻が施してあるものです。いいものを見つけたので買おうとしたら、じつはその家は病気で寝ているおばあさん一人で、近所の人が面倒を見ているんですね。近所の人がなんでも売つたほうがいいので持つていけと言っただけ、いくらなんでも病気で寝ているおばあさんの家の門扉をはずして持つていくことはできませんでした。いまだに門扉を収集したいという気持ちは残っています。私が飛行機で運びますので買い取つてほしいと、民博に頼みたいんだけど（笑）。

資料収集も現地の人の助けがあつてできたことです。男であれ女であれ、人間関係が大事であると痛感しました。私は人間が好きなんです。とりわけ女性が好きなんです（笑）。というのも、

ミーの民族学研究所と民博が提携していたのですが、そこで知り合った研究者がウズベキスタンと関係が深かつたこともあります。ウズベキスタンは中央アジアでいちばん人口が多く、遺跡も多く、いろいろ必要な要素があつて発掘することになりました。

一九八八年に奈良でおこなわれた「ならシルクロード博覧会」で、ソ連関係のもの、とくに仏教関係のものの展示にかかりました。そのためにウズベキスタンの首都タシケントに行つたら、遺跡から発掘されたばかりの仏教彫刻を見せられたんです。これはすごい、ぜひ持ち帰りたいということになって、すいすいと話が進んで、大型の仏像などを展示することができました。

同じ年に、東京の創価大学からシルクロードに関する講座を開講するので、こちらにこないかという話がありました。同時に、その創価大学創立二〇周年記念になにかよい事業はないかと相談されました。それなら、ウズベキスタンの仏教遺跡を発掘する調査団を組むのはどうだと提案をしました。こうして六年間、クシヤン朝（一―三世紀）の仏教遺跡であるタルヴェルジンテバの発掘に携わることになりました。

その大学を定年後、これからは何をしようかと考えて、年金を貯めて、ウズベキスタンに毎年一、二カ月きて発掘すれば楽しいんじゃないかと思つたんですね。そこでタルヴェルジンテバの近くに宿泊施設をつくることにしました。それが「加藤の家」です。私の家内が出資してくれました。彼女はじつは、私になかなか小遣いをくれないんですよ（笑）。でも、家をつくらうと言つたら、「出しましよ」と言つてくれました。

一九九八年三月から、「加藤の家」でタルヴェ



ルジンテパを発掘するつもりでいました。そんなとき、知り合いのウズベク人の考古学者から、「あなたはカラテパという大規模な仏教遺跡に関心をもっていたけど、いまでもやる気があるなら、ダルヴェルジンテパをやめてカラテパを発掘してはどうか」と連絡がきました。カラテパはアフガニスタンの国境近く、テルメズという町の近郊にある、中央アジアの歴史においても重要な仏教遺跡です。憧れはありましたが私には身にまわることだと思いました。

生きている限り続く 発掘作業

ダルヴェルジンテパとカラテパは発掘の環境がぜんぜん違うんです。ダルヴェルジンテパは、遺跡の上に一〇〇〇年にもわたる層位が積もっていて、仏教遺跡にたどりつくにはその層を取り除かねばなりません。しかもただ除けばよいというわけではなくて、なにかを発掘できたら報告しなければならぬんです。たいへんな手間がかかります。土壌も粘土質で固いのです。

ところがカラテパには仏教遺跡だけが残っていて、仏教以前にも、それ以後にもありません。

強い人たちであったのだと。その象徴としてアイハヌムと名付けたんです。音の響きもいし、豊饒の女神の加護を受けられると思つて(笑)。「アイハヌム」は、今年一月に財団法人関科学技術振興記念財団からパピルス賞をいただくことになりました。

——中央アジアはシルクロードもあつて、いろんな民族の往来がある地域ですね。

世界的にみると、まず西からギリシャ人がやってきました。次に南から仏教とともにインド人が入ってくる。ギリシャ人はそういう人数がきていたと思うけど、インド人と溶け込んでしまったわけです。そのあとはアラブ人が入ってきてイスラームがもたらされました。そして、次は東からトルコ(テュルク)人やモンゴル人が数波にわたって大量に入ってきます。一九世紀になると、西からロシア人がやってきます。

もともとこの地にはタジク人の祖先であるイラン系の人びとが住んでいましたが、同化されたり、山へ追いやりられたりしています。タジク人のなかにはいまでも、「ウズベク人をはじめとする



トルコ系民族やモンゴル人が外からやってきたおかげで、俺たちはこうして山に追いやりられているんだ」と主

しかも砂地だから掘りやすいのです。やっぱり一年だけでもやってみようと思つて発掘をはじめたら、三日目で大きな仏塔(ストゥーパ)の頭の部分が出てきました。これは大きな発見ができるかもしれないと思いました。

発掘作業を継続するために、奈良の薬師寺が事務局になり後援会をつくっていただきました。発掘をはじめた今年で一年目になります。そのおかげです。春と秋、年に二回発掘に行っています。大学などで科研費をもらつても、三年か四年で終わってしまいます。でもこれはまだ続けられます。生きていく限り続くんです。人の縁というのはすごいんです。私はこれまで、人の縁に恵まれてきたと思います。

——ウズベキスタンの遺跡は、ソ連時代は発掘はおこなわれていなかったんですか。

ソ連時代のほうが熱心でした。マルクス主義の影響です。マルクス主義の考え方で、初めに原始時代があつて、奴隸制、封建制、資本主義に発展してきたとされています。仏教時代は奴隸制にあたるので、その証拠を見つめるために熱心に遺跡発掘をおこなったんです。

カラテパは広い遺跡ですので、ソ連時代にも発掘がおこなわれていたのですが、私はその部分は置いておいて、手つかずのところから発掘をはじめました。ほかにもいまでも手つかずになっている遺跡がたくさんあります。ソ連が解体してからは、ウズベキスタン政府としてはお金を出せないのです。あまり熱心ではありません。外国人の出資による発掘はソ連崩壊前でしたが、私が最初でした。その後、ドイツやイタリア、フランス、アメリカも入ってきました。私のほかにも若い日本人たちが、別の遺跡を発掘しています。



ダルヴェルジンテパに自費で建設した「加藤の家」



カラテパ遺跡の最初の発掘で発見したストゥーパ(仏塔)の基壇部分(2008年)

張している人がいます。文化的にも、ウズベク人に奪われたと言わんばかりのことを言っていて、仲が悪いんです。

民族、国家を越えて結ばれる 世界

でも、いまさそんなこと言つても、なんにもはじまりません。ウズベク人とおおいにわたりあつて、彼らと力をあわせるほうが、みんなの生活も良くなると思います。でも、タジキスタン政府の政策はそうではなく、ようするに、俺たちはアジア系で偉大だと幻想をいだかせるようなやり方です。為政者が民族を統一するにはそういう方法しかないのかもしれない。

ウズベク人の学者のなかには、トルコ系の民族

民族と文化の交流の地 だからこそ……

カラテパの大仏塔の西側一帯は、まったく手つかずの状態においであります。ここはいろいろおもしろいものが発見できる可能性があるんですが、一緒に発掘している人に、「今度はあそこを掘ろうよ」と言つても、「いや、次の世代のために残しておいてほしいんじゃないか」と言うのです。思うに、私も歳だし、私が死んだときに、ほかの人への目玉としておことうとしていないんじゃないかと(笑)。ところが、おつとつこいまだ元気ですし、来年からやろうよと言つてみたら、やりましようと言っていました。向こうもあきらめたみたいですよ。

——二〇〇一年から毎年、『アイハヌム』という雑誌を個人で刊行されています。タイトルのいわれを教えてください。

アイハヌムはテュルク語で、月を表すアイと女性の尊称ハヌムをつないだ言葉で、「月の令婦人」とか「月姫」という意味になります。紀元前四世紀に中央アジアにアレキサンダー大王が遠征してきて、そのあと入ってきたギリシャ人たちがグレコ・バクトリア王国をつくり、ヘレニズム文化が開きます。その時代に、パミールの西、現在のアフガニスタンとタジキスタンの国境近くに、ギリシャのポリス(都市国家)そつくりの都市がつくられました。それがアイハヌムです。円形劇場など、ギリシャ的なものがすべて揃っていました。

ギリシャ人は、そんなところまで入つてきていたんですね。そういうものの影響があつて今日の中央アジアがあるわけで、文明の交流は遠い昔か

が何千年も前からこの地にいたと書いている人もいます。それはタジクに対抗するために書いたんでしょう。けど、その方向じゃだめなんですよ、どっちが古いかを競うなんて。

——過去のことにとらわれず、事実
は事実で、民族が混ざり合ったこと
をフランスに頼ればいいですね。

物事にはすべてに裏表があります。マイナスに見れば、全部マイナスに見えてきます。中央アジアのそれぞれの民族がみんな独立してもあまり意味はないし、一握りの人しかいい思いをしないのではないのでしょうか。

江上波夫先生(故人・考古学者)が、「いつか国家がなくなる日がくるのが待ち遠しい」と言っておられました。国家は民族とも強く結びついていますが、民族の独立意識が強すぎることがいろいろ問題の原因のひとつだと思います。

善かれ悪しかれEUという国家を越えて結びつく試みもあります。アジアにしても、台湾、韓国、日本、インドネシアなど、強い独立意識だけでは経済的に繁栄するのは難しいと思うのですよ。経済的に互いが結びついていかなければならない。そのためには、政治的には緩やかな関係を結ばなければならぬと思います。日本も一億の人口をもつて生活を守るには、ほかの国ともっと仲良くしなければならぬと、私は思います。

——ますますお元気な加藤先生に力を分けていた
だいたいです。ありがとございました。